学園スパイラル～部活編

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園スパイラル～部活編

【Ｎコード】
Ｎ１８８０Ｔ

【作者名】
河野　る宇

【あらすじ】
「今度のターゲットは彼よ！」
新聞部の副部長、長谷川　奈々（はせがわなな）は目の前の写真を指さした。
もちろん、他の部員はそれにざわつく。
※小説サイト「魔法のｉらんど」にも投稿させていただいている作品です。

＞私立、尾世ヶ瀬学園

関東のどこかにある高校、私立尾世ヶ瀬学園（しりつおよがせがくえん）。マンモス校という訳ではないが、全国平均よりも学力は高いと思われる共学制の高校だ。寮と家との通学方法がある。

この学園の校舎は十字の形になっていて、部室は主に西側の建物に集中している。部屋の大きさはほぼ一定だ。

大体、畳十畳分くらいで大きめかもしれない。その1室が何やら騒がしい。

「なんでだめなのよ」

「だめなものはだめです！」

『新聞部』と表記されている部屋で男女が言い合っていた。

「長谷川さん、本気なんですか？」

「本気よ。何がいけないっていうの」

女生徒の言葉に、細身の男子生徒が頭を抱えた。

「どうして、よりにもよって彼に目を付けるんだい」

「この学園いちの有名人だからに決まってるでしょ」

鼻を鳴らして胸を張る女生徒、1年の長谷川　奈々（はせがわなな）に男子生徒は呆れて溜息を漏らす。奈々は新聞部の副部長、言い合っている相手は部長の鈴木（すずき）　俊和（としかず）。3年生だ。ちょっとはねた髪が愛らしい。

＞我ら尾世ヶ瀬学園、新聞部

俊和は長机に乗せられている1枚の写真に目を落とし、軽くテーブルを叩いた。
「彼には近づくな」
「そんな彼女相手みたいなセリフ言わないでください。疑いますよ」
「気持ちの悪い事を平然と言うな」
「身長差からいけば部長が“受け”ですよね」
「……奈々くん。気持ちの悪い会話を続けないでくれたまえ。彼とは2？しか違わない」
俊和は眉間にしわを寄せた。しかし、周りにいた女子新聞部員の数人が嬉しそうに話に花を咲かせる。
「いつも匠サマと一緒にいる健君なんて絶対、似合ってるよね～」
「そうそう、王子様と側近。みたいで」
「もちろん健君が“攻め”だよね～」
「……」
俊和は二の句が継げなかった。女子というものはどうしてこうそんな話が好きなのか……呆れて何も言う気にはなれないが奈々が提案している事については反論する。
「とにかく！　奈々君の提案はボツだ」
「部長ヒドイ！」
わざとらしく泣いた演技で部室を飛び出す。
「……まったく」
俊和は肩をすくめてパイプイスに腰掛けノートパソコンをいじり始めた。1年の新聞部員がそんな俊和にぼそりと問いかける。
「どうしてダメなんですか？」
他の1年部員も不思議がって頷いた。実は今回、新聞部は『生徒の1人を密着取材！』という記事で書こうとみんなで決めたのだが副部長の長谷川　奈々がよりにもよって学園いちの有名人である「

周防（すおう）　匠（たくみ）にしたい」と言いだしたのだ。
それを2年と3年の部員たちが猛反対。いつもは中間を提案する部長の俊和までもが今回は反対に回った。
「有名人には、そうなる理由があるんだ」
「……」
1年部員たちは互いに顔を見合わせて首をかしげる。他の先輩部員たちも、皆一様に口をつぐんだ。これほどに反対される人物って……一体？

「もう！　部長のバカっ」
奈々は廊下を歩きながら腕を組んで腹立たしげにつぶやき続けた。新聞部は現在、部員数15人。文化系の倶楽部にしては多い方だ。
焦げ茶色の髪を乱暴にかき上げて放課後の学生食堂に足を踏み入れる。
「！」
そこに、たった今揉めた人物が友人であろう男子生徒と白い長机のテーブル席に座っていた。
オレンジの日差しが影を作っている校舎――整った顔立ちにその綺麗なオレンジの日差しが当たり奈々は思わず小さく溜息を漏らした。
17歳、2年5組の周防（すおう）　匠（たくみ）は草色のブレザーを椅子の背もたれにかけ紺色のネクタイをゆるめて微笑んでいる。
肩甲骨くらいまで伸びている後ろ髪を1つに束ねている姿は他の男子生徒なら「キモイ」と言われるだろうが彼ならば切れ長の瞳とすらりとした体を引き立てるのに充分、役立っていた。
「……」
奈々は彼らの会話が気になってゆっくりと近づいていく。どうやら例の『側近』と一緒らしい。勝手に決められた主従関係の構図だが確かに想像としては合っている。
「だからー火薬は花火のを使えばいいんじゃない？」

「かき集めるのに一苦労だ」
紙パックのジュースのストローをくわえて匠がつぶやく。向かいの席にいるのは城島（きじま）　健（けん）。快活な少年といった感じで茶色がかった髪をかき上げる。
この2人、部活には入っていない。健の場合は試合の助っ人として存在しているため決まった部活には入れない。といった方が正しい。
匠に至っては……彼を収められる教師も生徒も存在しない。そして1つの事に満足できない性格なのだ。
「……」
火薬？　なんの話をしてるんだろう。奈々は音をさせないように忍び寄る。
「爆破させるのにはかなりの火薬が必要だ」
「！？　爆破っ？」
匠の言葉に奈々は思わず声を張り上げてしまった。口を両手で塞いで立っている奈々を2人は目を丸くして見つめる。
「えーと、誰だっけ？」
「1年生のようだね」
怒ることもなく2人は奈々を見て会話を続けた。
「あっ、あたし長谷川　奈々。新聞部の副部長してます」
「そうなんだ～」
「ほう」
関心を示すように奈々を見つめる匠。片肘をつき、その手に頭を乗せている仕草は上品で奈々は顔が緩んだ。
どうして部長は彼の密着取材に反対するんだろう……そう思っていると匠がおもむろに口を開いた。
「俊和は元気かい？」
「え、部長を知ってるんですか？」
「私が入学した時に少し世話になった」
「あれ以来、避けられてるけどね～」

健の言葉に、奈々はいぶかしげな表情を浮かべる。
「一体、何があったんですか？」
不思議そうに見つめる奈々に匠はニコリと笑った。
「大した事じゃないよ。入学時にちょっとした揉め事があっただけ」
「そうそう。匠の争奪戦」
「争奪戦……？」
ますます解らない。奈々は部室に戻る廊下で唸りながら歩いていた。

部室に戻ると部長の俊和がノートパソコンと向き合っている。
「！」
戻ってきた奈々を一瞥し作業を続けた。
「部長、彼の入学時に何があったんですか？」
「！？」
その言葉に俊和は狼狽（ろうばい）したのか、ノートパソコンのキーボードに乗りかかるように手をついた。
「な……なんの話だ」
明らかに焦っている、慌てている……奈々はにじり寄るように俊和に近づき再び問いかける。
「彼と何があったんですか？」
「知らん！　オレは知らないー！」
「わっ！？　部長！？」
俊和は叫びながら部室から飛び出し、走り去った。
「……一体、何があったの？」
奈々は呆然と、俊和が走り去った廊下を見つめた。

＞記者魂

「待ってください！」
奈々は必死で教師の背中を追いかける。
「先生！　廊下は走っちゃだめじゃなかったんですか！？」
「時と場合によるんだ！」
「待ってよ！」
新聞部の先輩たちから必死に（半ば脅迫まがいに）問い質して、ようやく体育教師が“例の件”に詳しいと聞いたのに……！
息切れした奈々は追いかけるのを断念した。悔し紛れにダン！と左足を踏み込む。
「一体、何があったっていうの？」
絶対に調べてやる。奈々の記者魂に火が付いた。肩までの髪を決意したようにポニーテールに束ねキリリと前を見据える。
「そうよ、知ってるのはもう1人いるわ」
「え？　健？　さあ～」
奈々は2年5組を訪れて城島　健の行く先を訊ねた。教室を覗いてみたが健も匠も姿が見えない。
「ああ、あいつなら今日はバレー部の助っ人に入ったよ」
別の男子生徒が教えてくれた。
「あ、じゃあ……あの」
「匠？」
「はい」
「あいつは帰ったんじゃないか？　帰宅部だろ」
「え？　そうなんですか？」
意外……生物部とか科学部とか入ってそうだったのに。
「あいつもたまにバスケ部の助っ人やってなかったか？」
「あー最近はやってないみたいだぜ」
「あいつの運動能力は異常だもんな」

「……」
気が付けば奈々の周りには匠の話をする男子生徒が集まっていた。みんな彼に興味があるのかしら……などと奈々は彼らの会話を聞きながら考える。
「でもよ、新聞部が匠に何の用なんだ？」
「えとですね……周防さんの事を記事にしようかと」
その言葉に教室の空気が一瞬、張り詰めた。
「止めた方がいいよ」
ぼそりと誰かが言った。それに全員が賛同するように頭を縦に振る。
「なんでですか？」
「あいつに関わるとロクな事が無いからだよ」
ロクな事がない？　見た処クラスの人たちからは人気あるようなのに……奈々は不思議で首をかしげた。
「俺たちはもう慣れたっていうか、免疫ついてるっていうかでさ」
「そうそう。ヘタに関わると痛い目見る奴もいるんだ」
痛い目……それって……
「うちの部長とか？」
「あ～あれは災難だったな」
「まあでも、あれは仕方ないんじゃね？　入学してすぐだったし。誰も免疫無いって」
「でも健だけはノリノリだったじゃん」
「あいつ頭無いもん」
エラい言われような健だが確かに成績は良くない。
「食い物ですぐに釣られるし」
「！」
食べ物……？　奈々はピクリと反応した。
「そうなんですか？」
さりげなく聞き返す。
「ああ、食べ物で釣れば大体の事は引き受けてくれるよ」

「ありがとうございます」
奈々は丁寧にお辞儀をして教室から出て行った。
「いいこと聞いた」
鼻歌がこぼれる。夕日が自分を褒めているように奈々には見えた。
このまま諦めてたまるものですか！
教室に戻り帰り支度を終えて女子寮に向かった。南側の棟が1年棟。その1年7組が彼女の習う教室だ。
因みに男子寮と女子寮は隣り合わせに建てられていて学園から数十メートルの処にある。学園と寮をつなぐ道は学園の私有地だ。
門限は8時。寮長は寮生たちが1年に1回、投票を行い決定する。男子寮の寮長は生徒会長の斗束（とつか）　耕平（こうへい）、女子寮の寮長は生徒会書記の伊藤（いとう）　亜矢（あや）だ。
とにかく明日が勝負！　城島　健を見つけ出し例の方法で聞き出してみよう。

＞語り部

「そんなに知りたいの？」
次の日、学食に1人でいた健を見つけて奈々は再び問いかけてみた。聞き返してきた健にしっかりと頷く。
「欲しいもの1品、おごります」
「交渉成立！」
健はニパッと笑って券売機の食券を指さした。
「……」
くっ……これは食堂でも高めのメニューじゃない。足下(あしもと)見たわね。
奈々は苦笑いを浮かべて券売機にお金を滑り込ませた。
「で、何があったんですか？」
デミグラスソースのかかったオムライスの横にカツが2切れ添えられている皿にスプーンを沈めて健は問いかける奈々に目を向ける。
「この学校って、入学式の時に色々やるでしょ」

>黒歴史

「！　ああ……あたしの時は確か、お化け屋敷だった」
季節外れのお化け屋敷を体育館で行い、それなりに親睦（しんぼく）は深まったのかもしれない。新しく入ってくる新入生を和ませようと2年と3年が話し合いイベントを繰り広げる。それがこの学園の恒例行事だった。
「俺たちの時は仮装パーティだったんだよ」
「へえ……」
カツを口にほおばって健は続けた。
「男女が入れ替わるってやつでね。かなり凄い光景だった」
全員が女装や男装をして体育館に集まり、先輩たちの激励の言葉を受けた後には乾杯の音頭を校長が取り入学式は終了する。予定だった――
「い……一体、何が起こったんですか？」
「ジュース飲んだ奴が酔っぱらっちゃったんだ」
「！？　お酒だったんですか？」
健はそれに左手を軽く振って笑う。
「違う違う。酔ったようになる成分を誰かがジュースに混ぜたの」
そういうのにも効き目に個人差があって泥酔状態の生徒や先生が多数出た。
「……」
奈々は少し考えて健に問いかける。
「もしかして体育の先生は……」
「あ～凄い酔ってたね」
奈々は生ぬるい微笑みを浮かべると同時に、とんでもない光景を想像して青ざめた。確かに隠しておきたい事件かもしれない……言うなれば学園の黒歴史だ。
その流れからいけば部長の鈴木俊和に何かがあった事は明らかで

ある。聞きたいような聞きたくないような衝動に奈々はかられた。
「おっと、もうすぐお昼終わりだ。それじゃあ話はここまでね」
「え……？」
明るく去っていく健の後ろ姿を奈々は呆然と見つめた。
「終わりって……」
続きを聞きたきゃ、またおごれって！？　奈々は昼休みが間もなく終わりを告げるチャイムを耳にしながら引きつった笑顔を浮かべた。

「一番、聞きたい部分が聞けなかったじゃない」
放課後、ぶつくさと独り言を吐き出しながら廊下を歩く。
「はぁ～……」
季節によっては南側にある1年棟は早くに暗くなる。この季節はまだオレンジの日差しが建物の内部をわずかに照らしていた。
それも1階まで降りると西棟の影が邪魔をしてしまうのだが下駄箱は学年に応じて分けられている。南棟には1年の下駄箱しか無い。
因みに、東は2年棟で3年は北棟だ。西棟は部室と職員室、医務室などが集められている。十字型の建物のため、みんな中心でつながっていた。
「！」
そんな奈々の前に、すらりとした立ち姿。周防　匠が1人で歩いていた。
「！」
向こうも奈々に気付いたようでニコリと笑いかけてくる。その笑顔に腰砕けになりそうだったが、なんとか我を保ちペコリと軽く頭を下げた。
「！」
近づいてくる匠に奈々は心臓がバクバクした。
「もう帰るの？」
「は、はい……今日は部活は休みです」

「ああ、そうか。じゃあ気をつけてね」
「ありがとうございます」
後ろ姿を見送り奈々はハッ！？　と気が付いた。
「本人から聞けるチャンスだったのに……」
つい見惚れてしまった。奈々は残念そうに指を鳴らす振りをして靴を履き替えた。

>ナイト

次の日――奈々は凝りもせず健を探した。
「！　いた……あ」
食堂で見つけたが今日は匠が隣にいる。奈々はさすがに本人の前では訊きづらかった。
「また今度に……お！」
諦めかけたその時、匠が１人席を立ち食堂から出て行く。
「チャンス！」
奈々は素早く健の前に立った。
「！　あ、昨日の」
「あの続き、教えてくれませんか？」
「え、聞きたいの？」
当り前でしょ……まだ前座じゃない。引きつった笑顔で奈々は頷いた。
「……」
「……」
しばらく無言で向き合う２人。
「わかったわよ！　おごればいいんでしょ！」
業を煮やした奈々が財布を取り出し５００円玉を机に叩きつけた。
「ちょっと！」
「何よ！」
いつもニコニコしていた健が勢いよく立ち上がり声を張り上げる。奈々も負けじと声を荒げた。
「お金をそんな風に扱っちゃだめ！」
「へ……？」
５００円玉を取って奈々に見せながら健は言い聞かせるように口を開いた。
「これはお父さんやお母さんが稼いでくれたお金だよ！　それを手

荒に扱うなんて失礼だろ」
「……」
ちょっと意外な言葉を彼から聞かされて奈々は少し反省した。しかしそれなら気前よくおごらせるな。と言いたい処だがそれとこれとは別の話らしい。
「なに食べようかな～」
健はその５００円玉を握りしめ鼻歌交じりで券売機に向かった。ぴったり５００円の月見きつねうどんのボタンを押し食堂のおばさんに食券を手渡す。
「……」
その一連の動作を見つめたあと奈々はがっくりと肩を落とした。
「本当にバカなんだ」
年上に失礼な言葉をぼそりとつぶやいた。そして気を取り直して改めて健に質問する。
「昨日の話の続きを聞かせてください」
「ん～そんな大した事じゃないけどなぁ」
大した事じゃないのならどうしてみんな口を閉ざす……奈々は呆れて騒がしい食堂の中で聞き漏らさないようにと聞き耳を立てた。
健はうどんをすすりながら昨日の続きを話し始める。
「で、匠の場合さ～そのままでもキレーだろ？　かつら被っただけでも美人になるのに女子の先輩たちが面白がって化粧までしてたもんだから、酔ってた連中が匠をナンパし出したんだよね」
「！　ナンパ！？」
「匠はお姫様のコスプレしてたもんだからさ、もう似合っちゃって似合っちゃって」
「……」
確かに……ガチで美女になってたかもしれない。奈々は想像を膨らませて顔が緩んだ。
「そのうちに匠を捕まえた奴が付き合えるっていう変なルールが出来てさ」

「……追いかける人も男子でしょ」
「うん、そう。女装してる男子が女装してる匠を追いかけたワケ」
奈々は想像して「ゲェ～」と顔を歪める。健は油揚げをひと口でパクリとたいらげて続けた。
「まあ、その時に匠と仲良くなったんだけど」
「！　へえ」
「俺、ちょうど女騎士の恰好してたから匠の守りに回ったのね」
「……へえ」
初めからナイト的位置だったんか……奈々は薄笑いを浮かべる。
「もう凄かったよ～敷地内をあっち行ったりこっち行ったり。追いかけてくる奴らをことごとく投げ飛ばして、最後に残ったのは2人」
うどんを口にほおばりながら左手で数を示す。
「……その2人って」
「えと、仲野先生と俊和」
やっぱり体育教師と部長か！
「っていうか、先生まで何やってんですか」
「あん時はもうベロベロだったからね～」
健がへらへらと笑う。しかし健の強さにも奈々は目を見張った。追いかけてくる男子たちを彼はことごとく投げ飛ばしていったのだ。感嘆する他はない。
「でもね、匠が途中でキレちゃってさ」
「え！？　周防先輩が？」
奈々は驚いて少し腰を浮かせた。すると健は笑いながら左手を振る。
「あ～キレたって言っても解るようなキレ方じゃないよ。すげー無表情になるから」
「無表情……」
なんか、そっちの方が怖くない？
「あいつさ～あっちこっちに仕掛けておいた爆弾のスイッチを押しちゃったんだよね」

「ばっ爆弾！？」
再び驚く奈々に健はまたしても左手を軽く振る。
「爆弾って言っても花火だよ。大量の花火」
「……どうしてそんなものを仕掛けておいたんですか」
「余興にと思って勝手に設置したらしいよ」
奈々は目を丸くした。新入生が勝手に設置……？　なんたる度胸。
「それが予想以上に火薬量が多かったみたいでね。スイッチを押した途端にもの凄い爆音があっちこっちで起こってさ」
「それでよく退学にならなかったですね……」
「そりゃあ出来ないよ。匠を呼んだのは学園なんだもん」
「え！？」
「匠は中学の時から頭が良かったらしくてあちこちの学校からスカウトされてたんだって」
そうして獲得に成功したのが尾世ヶ瀬学園。必死になって招待した学生をそう簡単に退学になど出来なかった。
「……もしかして、確信犯？」
追い出せない事をいい事に彼は好き放題やっているのか？
「確信犯て何？」
へろっとした顔で健が聞き返す。奈々は大きく溜息を吐き出しようやく解決した疑問にきりりと目をつり上げて立ち上がった。
「ありがとうございました」
にっこりと健に笑いかけ学食をあとにする。

＞驚愕の事実

部室に戻った奈々は先輩たちに話を聞いた事を語った。
「あちゃ～バレちゃったのか」
３年の部員が頭を抱える。
「その成分を入れたのは誰だったんですか？」
「未だに誰かは解ってないんだ」
先輩は笑って椅子に腰を落とす。開き直ったようで、何でも訊いてくれと言わんばかりに笑顔を浮かべた。
涼しい目をした３年２組の青木（あおき）　大（まさる）は新聞部の中でもムードメーカーと言ってもいい。
「みんなが追いかけ回すほど綺麗だったんですか？」
「そりゃあもう！　あのまま外に出ても絶対、解らないぜ」
「くっ……写真があればいいのに」
それを聞いた奈々は悔しそうに舌打ちした。
「あるよ」
「えっ！？」
大はそう言って立ち上がり棚の奥から何やら怪しいファイルを取り出した。
「……なんですかそれ」
「ボツ原稿やらをファイリングしておく秘密のファイル」
そんなものがあったのか……初めて聞くファイルに奈々は唖然とした。そして気を取り直してめくられるファイルを眺める。
「！　あった、これこれ」
「……ひゃ～」
差し出された写真に奈々は感嘆の声を上げた。
「あん時はまだ１年で背もそんな高くなかったし今よりも可愛かったからね」
大はすぐに写真を閉じてファイルを棚の奥に隠すように仕舞う。

奈々は残念そうに見つめるが黒歴史を長く広げておきたくないのだろう。
「城島先輩はナイト役だったとか」
「あいつノリだけはいいからね。確かに強かったし」
健は中学の時から柔道の黒帯保持者だった。相手に怪我を負わせずになだめる術を持つ彼にはうってつけの役柄だったに違いない。
「でも……花火まで持ち出したんでしょう？　しかも勝手に。それでよく何もなかったですよね」
「ま、学園側が呼んだ相手だしねぇ」
「そこまで不問にするほどの人とは思えませんけど……」
「あ、もしかして……あれがあいつの実力だと思ってる？」
大の言葉に奈々は眉をひそめた。
「ＩＱ１２０以上じゃないんですか？」
確かにレベルは高いけど目を見張るほどって訳じゃないんじゃ？
「違うよ。多分だけど２００超えてるんじゃないかな」
「！？　はあっ？」
奈々は勢いよく椅子から立ち上がった。
「どういう事ですか……？」
「あいつ、真面目にＩＱテスト受けた事が無いらしいんだ」
まさに天才となんとかは紙一重ってね。と大が笑いながら肩をすくめた処で俊和がノートパソコンを抱えて部室に入ってきた。
「！」
部室の雰囲気に少し怪訝な表情を浮かべたが、いつもの自分の席に腰掛ける。奈々は目を据わらせて俊和を見つめニヤリと口角をつり上げた。
「お姫さまをさらえなかったんですね」
「！？」
俊和はビクッと体を強ばらせた。
「……」
ニヤけている奈々を見やり眉間にしわを寄せる。

「知ったのか……」
「はい」
俊和は溜息を長く吐き出し頭を抱えた。
「部長も昔はアクティブだったんですね」
「そういうレベルか！」
過去の失態にうなだれる。彼の一生の汚点となった事は言うまでも無かった。
「はぁ～忘れたい」
酔った（ようになる薬を飲んだ）挙げ句に男を追いかけるなんて！
「大体、あの2人だってジュースは飲んだハズなのに、なんで平気だったんだ」
「効き目にも個人差があるって言ってましたけど」
「匠の場合はコップ半分くらいだったかもしれない。しかし城島は何杯も飲んでたんだぞ」
「じゃあ、あの薬が効きにくい体質だったんだよ」と大。
「……なるほど」
なんとか納得しようとしている俊和を奈々は軽くのぞき込んだ。
「周防先輩と仲良いんですか？」
「！　何故だい？」
「だって、周防先輩の事は名前で呼んでいるので」
「そりゃまあ新聞部としては、ああいう人物は非常に助かるもん」
「！？　大！」
俊和は慌てて大を制止した。
「どういう事ですか？」
「知識豊富って事」
言いながら大はこめかみを右手の親指で示した。ギロリと睨み付ける俊和に「諦めろよ」という風に肩をすくめる。
「わざわざ調べなくて済む事が多くてさ」
「！　ああ……なるほど」
俊和はあの件以来、匠とは仲が良かった。しかし汚点である事は

事実。そのため、おおっぴらには仲が良いようには見せないでいた。
「……ささやかな抵抗ですね」
「ほっとけ！」

＞とにかく解決？

奈々は納得してこの件には触れない事にした。自分の学園にとって不利となるような記事は出来れば残したくない。
学園の黒歴史を知り周防　匠という人物についてもなんとなく理解出来た事に自身にとっては収穫だったと思う。
「……ん～？」
しかし、何かがひっかかっていた。思い出そうと腕を組んで頭を傾ける。
「なんだったかなぁ」
記憶を必死にたぐり寄せるがなかなか掴めない。
「何か物騒なことを話してたような気がぁ～……」
瞼（まぶた）を強く閉じて唸った。
「あ！　思い出した！」
そうよ！　初めに周防先輩の処に行った時、爆破とかなんとか言ってなかった！？
「まさか……校庭爆破」
言ってすぐに笑いをこぼす。
「んな訳ないわよねぇ～」
瞬間、青ざめる。
「……やりかねないわよね」
奈々は慌てて駆け出した。

＞ネギボウズ

「え、周防？　知らないなぁ」
「さっきグラウンドにいたけど」
「そういや庭園の方に歩いてったぜ」
情報を頼りに庭園に！
「いた！」
「ん？」
「うん？　奈々君か」
庭園の中心、小さな噴水のベンチで健と匠が何やらいじりながら会話していた。奈々は恐る恐る近づく。
「！？　なに作ってんですか？」
「爆弾」
「……と、言いたい処だが花火だ」
笑って言った健に心臓が飛び出るくらい驚いた奈々だが、匠の言葉でホーと胸をなで下ろす。
「花火？」
奈々は怪訝な表情を浮かべて匠がいじっている物体を見つめた。紙で丸く形作られたくす玉のような形だが、大きさは直径１ｍほどもある。
くす玉かと思ったが、足が１本生えていて無数の花火が突き刺さっていた。どちらかというとタンポポかネギボウズな見た目。
「なんですそれ……」
奈々は匠の手にある機械に指を差した。
「起爆スイッチ」
手に持っているゲームのコントローラーを示す。
「起爆……それが？」
「いじってある。起爆装置が入っているから予定よりも大きくなってしまった」

匠は残念そうにネギボウズを見つめる。見た目ほどの中身じゃないんだ……奈々は少し安心した。
「でも……なんでこんなもの」
「頼まれたんだよ」
健が笑って応える。
「夏らしく派手な花火が見たいと言われてね」
匠が続けた。
「……」
そんなもん市販の花火で済ませろよ……奈々は頼んだ奴を殴りたい気分になった。
「誰に頼まれたんですか？」
「同士一同」
つまり同じ2年の人たちね……
「と言っても、寮にいる者しか見る事は出来んがね」
「寮の庭で上げるんだ」
「ちょっと待って……でもこの形、横にも飛ぶんじゃないの？」
明るく発した健に奈々は制止するように軽く手を挙げた。敬語なんか使ってられない状況だ。
「大丈夫。横は吹き出し花火だから」と健。
「でも爆破とか言ってましたよね」
「例えだよ。爆破させる勢いの派手な花火っていう」
「本当ですかぁ～……？」
どうもこの2人は信用できない。
「……」
健と匠は奈々からゆっくりと視線を外す。
「……今、なんで目を逸らしたんです」
「仕方がない、奈々君にだけ教えてあげよう」
匠はそう言ってネギボウズの斜め辺りに指を差した。
「この1本、私の特別製だ」
「特別製……？」

「他は市販品だけどね」
２人の意味深な微笑みに奈々は少しゾクリとした。
「これ……どこに向かって飛ぶ計画なんですか？」
「斗束（とつか）の部屋」
「！　斗束って生徒会長の？」
斗束　耕平は匠たちとは同級生だ。もちろんこの花火計画は斗束だけには知らされていない。
「なんで教えてないんですか」
「反対するに決まってるからだろ」
「その腹いせに斗束先輩の部屋に花火飛ばすんじゃないでしょうね」
「我々はそんな心の狭い人間ではない」
怒ってはいないが匠は淡々と発した。
「……」
しっかしなんでこんなしゃべり方なんだろうな～この人。喋らなければ凄い格好いいのに……
『天才となんとかは紙一重』――奈々の脳裏に過ぎった言葉。人当たりが悪いわけじゃないし人付き合いも良好っぽい。嫌味な性格でもない。なのに……どこかがバカだ。
これが周防　匠なのか……奈々は頭を抱えた。
「という訳で君も共犯ね」
「え……」
健の声にハッとする。共犯？
「知っていて言わないのだ。立派な共犯だな」
「ちょ……ちょっと！　誰が言わないなんて……っ」
焦る奈々に匠はその端正な顔を近づけて小さく笑った。
「！」
奈々は心臓がドクンと高鳴る。
「言うと後が怖いよ」
「い〝っ！？」
静かな声と微笑みに奈々は固まった。この人なら何をするか解ら

ない……そんな恐怖がむくむくと盛り上がり血の気が引く。
「君も寮なんだろ？」
「え、はい」
問いかけた健は返ってきた言葉にニッコリ笑った。爽やかな野球少年のように（野球部には所属していないが）。
「じゃあ、楽しみなよ」
「え……」
２人は奈々に笑顔を向ける。彼女はその表情を呆然と眺めた。

＞夜に咲く花

「結局あのまま何も言えなかったわ……」
決行は今夜とか言ってたけど、どうしよう。奈々は寮に帰る道をトボトボと歩いていた。
「！」
寮に帰るとみんななんだかそわそわしているように見える。と言っても2年と3年だけだが1年にはナイショにしているらしい。
「……」
先輩たち楽しみにしてるんだ……奈々はみんなの顔を見つめた。
「共犯……でもいいや」
奈々はつぶやいて庭が見える窓に目を向ける。決行は9時３０分くらいって言ったよね……あと2時間以上ある。
「！」
時間つぶしに食堂に来ると生徒会長の斗束　耕平が同級生と談笑していた。食堂は男女共同なのだ。
「……」
奈々はなんとなくそれが計画的なものだと気が付いた。
食堂のテレビを眺めてその時を待つ――9時２０分。耕平と話していた連中が立ち上がり耕平を部屋に戻るようにし向けている。早くしないと計画が失敗しちゃうよ……奈々はドキドキした。
耕平の部屋は2階のど真ん中だ。なるべく自然に、バレないように耕平の友達は歩いているが……奈々は気が気でない。
「！」
なんだかんだで計画の成功を願っている自分に呆れて小さく笑った。
彼らの後ろ姿を見つめる。男子寮までついていく訳にはいかないので背中を見送るしかない。

「なんだよおまえら……」
「いいから、いいから。もうすぐ半だしさ、部屋でゲームでもしようぜ」
「なんで半なら部屋でゲームなんだよ……」
「テレビも飽きたろ」
3人のうちの1人は腕時計に視線を落とした。そして――
「今だ！」
「ドア開けろ！」
「！？　何し……っ」
「ドア閉めろ！」
突然、部屋の前で1人に肩を掴まれ1人はドアを開き押し込まれるようにして部屋に詰め込まれると、ドアを閉められた。
「おいっ！　なんだよ！？」
耕平は閉められたドアに駆け込む。と、同時に――！
「スイッチ・オン」
庭にいた匠がコントローラーのボタンをちょいと押した。
「わあー！」
「綺麗！」
方々に広がる色とりどりの光。その中に1本、白い煙を吹きながら2階に向かって走る光が……
「！　うわぁー！？」
闇夜に響く叫び声。ゆっくりと耕平の部屋のドアを開くと紙吹雪にまみれた耕平が転がっていた。
「ぎゃはははは！」
「やったぜ！　匠」
「匠……？」
放心状態で転がっていた耕平がピクリと腕を動かした。そしてガバッと立ち上がる。
「うお！？」
「立ち直りはええっ」

「これは匠の仕業か」
「あ、いや……依頼したのは俺たちだよ」
そんな言葉も聞いてか聞かずか耕平は猛ダッシュで庭に向かった。
「速ぇ！」
「体育の時に発揮すればいいのに」

「匠！」
「お、耕平どうだった？」
明るく言った健をギロリと睨み付け、匠に目を移す。
「どうだった？　じゃない！　なんて事をしてくれるんだ！」
「まあどうぞ」
「へ……」
出されたのは線香花火。わらの芯で作っている関西のものだ。
「取り寄せてもらった」
「これ……」
そうだ、前に友達と「関西の線香花火をしてみたい」って廊下で話していた。匠はそれを聞いていたのか……
「……」
耕平はそれを1本、受け取りしゃがみ込んだ。匠と健も同じようにしゃがみ込んで耕平の線香花火に火を付けた。
それは、風のない暗闇で綺麗に跳ねるようにパチパチと音を立てて咲く。
「……」
耕平は黙ってそれをじっと見つめていた。

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1880t/

学園スパイラル〜部活編

2011年8月30日03時24分発行